

平成26年度 経営協議会学外委員等からの意見と対応状況

番号	経営協議会	内容区分	学外委員等からの意見	本学の対応状況
1	第46回 H26.4.17開催	組織運営（教育）	3つの研究科が統合することを生かして、教育システムの多様化に取り組んでほしい。	知識科学の方法論を全学に展開することにより、研究開発成果をイノベーションに結び付けることができる能力を身につけた「知的にたくましい」イノベーション創出人材の輩出を目指し、知識科学に基づくデザイン思考教育の方法を取り入れた講義を全学で試行した。
2		組織運営（研究）	一研究科体制の特色を生かして、異なる学問分野による学際的な研究領域を具体化してもらいたい。	従来の12領域(知識4領域・情報5領域・マテリアル3領域)を9つの研究領域に再編することを決定した。このうち3つの研究領域については、従来の研究科の枠を超えて編成を行った。
3	第47回 H26.6.19開催	組織運営（産学連携）	産学連携本部の設置は非常に良いが、産学連携で目指すところを明確にして、目的意識をしっかりと持ってやってほしい。	産業界及び行政機関等との連携による本学の研究の活性化と研究成果の社会還元を目的とし、本学が有する最先端技術や最新の科学的成果と産業界との交流の場として、産学官のネットワークサイト「JAIST-net」を創設したほか、北陸地域の大学との産学連携及び地域企業間の産学連携を目的としたマッチングイベントを産学連携本部の主催により開催した。また、平成27年度、北陸地域の民間企業との共同研究を目的とした研究活動において、次年度に共同研究契約の締結に向けて進展が期待される研究活動を行う職員に対して、期間を1年以内として支援する「共同研究推進助成事業」を創設した。

○アカデミックアドバイザーからの意見と対応状況

番号	アカデミックアドバイザー交流会	アドバイザーからの意見	本学の対応状況
1	知識科学研究科 H26.2.3開催	地元との関係がうまく研究に生かされている。石川県は、知識科学を受け入れる素地がある。地元と共同で研究をすることによって、理論的な研究を地元ニーズとうまくマッチさせることが、JAISTの強みになる。研究成果は、日本の学会やアジア中心に展開されているようだが、成果の発表を欧米にも展開することが重要。	北陸を起点として、世界展開を心掛けている。平成26年度は「技術経営」分野の国際会議(PICMET)の開催(井川教授が大会副委員長)により、本研究科の研究実績を欧米に広く知らしめるに至った。参加者数も最大規模であり、地域企業の貢献も多大であった。このような関係を柱に、知識科学の存在を欧米に展開する機会を今後増やしていく。
2		データと情報、の次には知識が重要であり、その先に価値がある。世の中、そういう方向でわかり始めており、追い風になっている強みを発揮してほしい。もう少し、横の協力、JAISTオールスターズのようなものがあるとアピールできるのではないかな？	知識科学の方法論を全学展開することで全学規模での融合を推進する、国立大学改革強化推進事業の構想に結びついており、イノベーションデザインやサービスサイエンスを軸に、産学官の連携という更なる横のつながりを意識した「未来ニーズの顕在化とそれを実現するイノベーション創出人材の輩出」の事業計画に反映している。

番号	アカデミックアドバイザー交流会	アドバイザーからの意見	本学の対応状況
3	情報科学研究科 H26.1.31開催	貴学は留学生および外国人教員の比率が高いことに特徴があるが、日本人学生のグローバル人材育成に役立っているかどうか疑問である。	日本人学生の海外への短期派遣を支援した。学生評議会の設立を支援し、留学生と日本人学生の触れ合う機会が一層増えるように配慮した。外国人教員への配慮として、会議は英語で実施することとした。
4		学生確保でこれまで以上の様々な工夫が必要と思う。	高専対応として体験入学受入れに本格的に取り組んだ。また、母校訪問にこれまで以上に注力した。海外有力大学からのインターンシップ受け入れを積極的に展開した。競争的資金を用いて優秀学生を雇用する等の新たな学生獲得モデルを検討した。社会人学生志願者のための講義公開、教育連携アドバイザー訪問による学生獲得ルートの開発、教員ごとの1分間の紹介動画公開等、多岐にわたって実施した。
5	マテリアルサイエンス 研究科 H26.1.24開催	学生募集で、質の高い学生にどうアピールするのか。本来、大学ではリベラルアーツを修め、大学院で専門に入るべきである。	大学院説明会等で高度な研究内容、充実した設備をアピールしている。平成26年8月に国際基督教大学、12月に立命館アジア太平洋大学と推薦入学に関する協定を締結し、優秀な学生を受け入れるルートを開拓した。
6		就職希望の学生に対し、インターンシップ等を使って幅広い体験をさせることも重要では。	きめ細かい就職指導を行い学生の意識を高めた。そのことにより、本研究科学生のキャリア形成活動費支援への申請が大幅に増加した(H25年度 16件、409千円→H26年度 24件、750千円)。

○インダストリアルアドバイザーからの意見と対応状況

番号	インダストリアルアドバイザーと学長との懇談会	内容区分	アドバイザーからの意見	本学の対応状況
1	H26.4.25開催	産学連携	大学教員の研究課題が現実社会の課題とマッチしないことが産学連携の障害となっている。今後は地域を含めた社会とのコミュニケーションが大学にとってますます重要。	産業界との連携の広がりを中心に、産業界と本学の新しい交流の場として新規にJAIST-netというネットワークサイトを製作した。今後はJAIST-netを活用し、産業界や地域とのコミュニケーションの機会を増やし、企業や社会のニーズに対応する予定。
2	H26.5.23開催 (東京サテライト)	産学連携	共同研究プロジェクトでは、相手のニーズを知り、同じ土俵に乗ってやらないと絶対にうまくいかない。その意味でも企業と教員・学生を繋ぐコーディネーターの役割は重要。	コーディネーターと教員間に研究プロジェクトの進捗管理、提案等を行うURA(リサーチ・アドミニストレーター)を平成26年より設置し、コーディネーターの活動がより具体的となるように対応している。
3		企業が求める人材	共同研究は、学生の境域の場とも考えていただければ教育効果が上がるのでは。	産学官連携客員教授と学生の接点を増やしていく方針である。企業インターンシップを実施し、社会ニーズ、企業ニーズに対する知識を深めている。北陸地域の産学連携・産産連携のイベントであるマッチングHUBへの学生の参加を増やしていく。